

受講者間の助言と評価を用いた学習

音楽教育講座・木村 勢津

1 授業の目的と到達目標

本授業は、音楽文化コース1年生を対象した授業で、3年間声楽を学ぶ基本姿勢を定着させることに主眼を置き、1年後学期に位置づけた授業である。

ベル・カント歌唱法の基礎的概念を学び、声と言葉の関係について考究し、歌唱実践を通して、その基礎的技術の修得に努めることを目的としている。

受講生は、大学入学前に高等学校における音楽の授業等で合唱等の経験は有しているが、独唱の経験は殆どない学生から個人的に声楽を学んだ経験をもつ学生まで多様であるが、声楽学習の経験の有無に拘わらず、以下の目標を設定した。

- 1) ベル・カント歌唱法を正しく理解し、その基本概念を説明できる。
- 2) イタリア古典歌曲を正しく発音で朗読することができる。
- 3) 歌唱曲について、その曲の背景や歌詞の意味を十分に理解し、楽曲に適した歌唱が行える。

2 授業の概要

ベル・カント唱法について、呼吸法、発声法、イタリア語発音と歌唱時における発音、発語の留意点に関する概説を行い、17～18世紀のイタリアバロックおよび古典歌曲の歌唱演習を通じて、知識、技術の取得を中心に授業を展開した。

受講生は9名。授業開始時に聴取した学生の要望を取り入れ、授業日程の前半では、毎回全員の個別指導を行い、後半では隔週毎に個別指導を行い、レッスン時間の確保を行うこととした。しかし、個々の進捗状況や中間発表の状況を踏まえ、後半の授業も毎回全員の個別指導を行って欲しいとの要望が学生から出され、これに対応した授業を行った。

3 授業の工夫点

1) 課題曲数の設定と受講者間の助言

未習外国語であるイタリア語や歌詞を伴う楽曲の見方に慣れ、自主学習を行うにあたっての各自の目安を設定するために、実技試験受験資格を最低3曲の合格曲を条件とした。また、事前の予習が充分でない場合は、個別指導を行わないことを授業開始時に確認した。

これらの条件設定により、伴奏合わせ時に、学習者間での意見交換を促し、受講の準備を行うことの徹底を図った。

2) 中間発表と省察

第8回の授業に中間発表の時間を設定し、ビデオに収録。演奏終了直後にVTRで演奏を振り返り、良くなった点や今後の改善点などを学生間で意見交換をする時間を設定した。

3) 学生による試験の評定と省察

実技試験において、姿勢・発声・表現意欲・音楽理解の4つの観点から、受講者間で採点を行わせた。各項目の持ち点を5点とし、その採点結果の平均点を評定に反映することとした。

4 アンケート結果

第15回目の授業終了時に行ったアンケートの結果は以下のとおりである。

(1) 授業時間外学習 (①非常に積極的②積極的③やや消極的④消極的)

① 22.2% ② 77.8% ③ 0% ④ 0%

(2) 担当教員の説明 (①非常に解り易い②解り易い③やや解り難い④解らない)

① 22.2% ② 77.8% ③ 0% ④ 0%

(3) 質問/意見の発表機会

(①非常に満足②満足③やや不満④不満足)

① 55.6% ② 44.4% ③ 0% ④ 0%

(4) 個別指導受講人数 (①適切②多い③少ない)

① 11.1% ② 88.9% ③ 0%

適切と考える人数について(自由記述)

- 3名 (1)
- 4名 (1)
- 3～5名 (1)
- 5～6名 (1)
- 6名 (1)
- 多くて5名以内 (1)

(5) 授業の進度

(①とても適切②適切③やや早い④早すぎる)

- ① 0% ② 55.6% ③ 44.4% ④ 0%

(6) 授業レベル (①とても適切②まあ適切③やや不適切④不適切)

- ① 44.4% ② 44.4% ③ 11.1% ④ 0%

(7) 教育実習や教育現場に役立つか (①非常に有効②有効③あまり有効でない④有効でない)

- ① 77.8% ② 12.2% ③ 0% ④ 0%

(8) 受講して良かった点(自由記述)

- ・独唱が初めての経験であったが、歌うことが少し楽しくなった。
- ・「声楽」と普段口ずさむ歌の違いをあらゆる視点から学べた。
- ・歌のポイントを学べた。
- ・分かりやすい説明と表現方法
- ・課題や欠点をはっきりわかる様々な意味で成長できる場
- ・3曲合格しなければ試験を受験できない制度。練習が不十分な回もあったけれど、緊張感を持って練習できた。
- ・多くの受講者の歌を聞くことで、発見があり、自分も頑張ろうという良い意味で緊張感を持って受講できた。
- ・「合わせる」ことの楽しさを知った。
- ・多くの曲にで空いたことが1番の収穫。

(9) 改善点(自由記述)

- ・レッスンを少しでも長く受けたので、受講者数をもう少し減らして欲しい。
- ・個人的な意見であるが、泣く、寝るなどの受講生は演奏室から出るような形にしてほしい。
- ・隔週でなく毎週のレッスンを希望。
- ・仕方がないが時間配分。
- ・1人1人のレッスン時間を均等にする。

(10) 1年次に勉強しておいた方が良くと思う声楽分野での内容(全表記)

- ・ブレス・姿勢
- ・言葉と音楽のつながり
- ・まず歌の本質を知ることだと思う。
- ・歌う時に基礎となる姿勢

- ・姿勢(2名)
- ・言葉を正しく読む
- ・声を出すことの喜び、楽しさ
- ・ベル・カント唱法
- ・イタリア語の発音

5 アンケート結果の分析と今後の課題

受講者は、授業準備は積極的に行っているとの認識があり、個別指導の時間について、十分な確保を望む声が強かった。この授業形態を維持するための適切な受講者人数は、3～6名の間に分布している。個別指導を期待して入学する音楽文化コースの学生にとって、現行の1人8分前後の時間は、やはり短いと感じるようである。指導者側の立場からも、特に声楽学習初心者への指導の徹底には、せめて楽曲1曲を繰り返す時間の確保が望まれる所である。

授業の進度についても、やや早いと感じる学生が半数に及ぶのは、個別指導の充実感を得られてないことにも起因すると推測する。

1年次に声楽領域で学んでおくべきことの設問に記された回答で、歌唱の基礎事項である姿勢やイタリア語の発音、ベルカント唱法の記載があった点は、授業のねらいが受講者に理解されたと感じているが、実際の授業において、到達目標3)については、個々の発音や発語ならびに読譜力の指導に時間が費やされ、適切な指導が行えたとは言い難い。

音楽文化コースのカリキュラムの改編により、様々な声楽体験をもつ学生をひとつの枠組の中で指導する現在の授業形態に授業者自身が暗中模索の状態であるが、声を出すことの楽しさ、声で表現できることの喜びを初年時に体感し、3年間の学習の礎を築けるよう更なる改善を図りたい。